● 読書感想文コンクール　中学校の部 ●

東京八王子西ロータリークラブ会長賞

橋本　望美（はしもと　のぞみ）　みなみ野小中（みなみ野中）　１年生

作品名：出会いはキセキ～本当の友達～
図　書：8分音符のプレリュード

　中学に入ってから、私は時間に余裕がなくなり、大好きだった読書もほとんどできなくなってしまった。そんなある日、久しぶりに部活が休みで、図書館に行ってみようと思った。
「何かおもしろそうな本はないかなぁ。」
とあてもなく探していると、ふと『８分音符のプレリュード』という文字が目に入った。私はピアノを習っていて、音楽関係のことが大好きだから、この本にすごく興味をもった。
「なぜ『８分音符のプレリュード』という題名なのかなぁ。」
「どういう意味なのかなぁ。」
「どんな物語かなぁ。」
ワクワク興奮しながら読み始めた。
　優等生であることにプライドをもつ、中学二年生・吹奏楽部の果南の学校に天才ピアニスト透子が転校してくる。透子は母が起こした事故で指にけがをしてしまい、輝かしい将来を断たれてしまった。このことをきっかけに透子は音楽に背を向けるようになり、学校でも気難しく、人を寄せつけない態度になってしまう。果南はそんな透子と出会い、影響を受ける。最初はお互いに分かり合えなかったが、共に中学校生活を過ごす中で、互いに心を開き、自分の生きる道を見つけ、素直に自分らしく生きていく。だんだん深め合っていく本当の友情と強い絆。信じ合える本当の友達に出会えたことを。
　私も友達とこんな関係になれたらいいな、とうらやましく思った。でも、ふつうの友達同士ではなかなかこんなふうに心と心がつながり信じ合える本当の友達同士にはなれない。そう思うと、私はまだ友達とそんな関係にはなれていない。自分の中にひそむ感情に気づかなかった果南と、前向きになれず音楽に背を向けてきた透子が出会ったことで、つらいこともあったかもしれないけど、そのおかげで自分ら

しく生きる道を見つけた。こんなにもお互いを必要としている人に出会え、理解し合い、信頼できる友達になれたのはキセキのようなことだが、これは果南と透子自身が導き出した答えなんだと思った。

この本には、さし絵などが一つもないが、情景がとても目にうかぶ表現がたくさんあった。中でも私が一番心に残ったのは最後の一文「次の瞬間、タクトは美しい弧を描き、透子にいざなわれるまま、果南は渦巻く音の流れに身をまかせた」だ。まるで自分がその場所にいるような感覚になった。こんな体験は初めてだったのでとても感動した。

そして、この本を何度も読んでいくうちに、疑問に思っていた、なぜ『８分音符のプレリュード』という題名なのかが分かったような気がする。八分音符は二つが合わさって一つの四分音符になり、プレリュードとは前奏曲という意味だ。果南と透子という二つの八分音符の物語はこれからの人生のほんの前奏曲にすぎないと思う。お互いを信じ合い、学び合っていくことで果南と透子の二つの八分音符はいつかつながって一つの四分音符となる。そして、自分の道を歩みながら通じ合っている二人の心がすてきなハーモニーを奏でていく。だから、この本には『８分音符のプレリュード』という題名がついているのだと思う。

この本を読んで、出会いとはキセキなんだと思った。この広い世界でお互いを必要としていた果南と透子が出会えたことは小さなキセキであり、今私が友達と一緒にいられることはすごいことなのだと思う。同じ日本に生まれても、同じ町でなければ、同じ学校でなければ、その人とは出会えていなかっただろう。今までは、そばに気の合う友達がいて、いつも一緒にいられることがあたりまえだと思っていた。でも、この本は、それはちがうんだ、と教えてくれた。本当の友達とは、どれだけ心から信頼し合っているかだと思う。たとえば、いつも一緒にいてどんなに近くにいても、それだけでは本当の友達とはいえない。たとえどんなに遠く離れていても、心が通じ合っていていつも信じ合っている、そんな関係を本当の友達というのだろう。

これからは、出会えたキセキをしっかりと胸に友達を大切にしていきたい。そして、いつか、心と心がつながっていて、お互いを理解し合い、たとえ遠く離れたとしてもいつも信じ合っている果南と透子のような本当の友達をみつけたい。

読み終わったあと、

「やっぱり読書って楽しい。」

と改めて感じた。読書をするといろいろな感情が溢れ出し学ぶことがたくさんある。これからも読書を続け、また素敵な本と出会いたい。